

舵取り

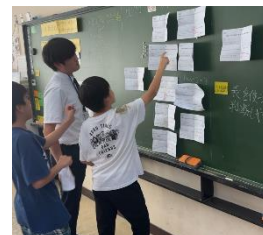
10月の1か月間、教育実習生が三宅小学校で学びを深めていきました。担当したのは6年生。若い感性をもって子供たちと向き合う姿は、教室に爽やかな緊張感と新しい風をもたらしていました。

研究授業では「反比例」を扱った授業が行われ、黒板には大きく「クイズ大会」と書かれ、学びへの意欲を高める工夫が凝らされていました。実習生は同じ目線にかがみ込みながら、

「どうしてそう思うのかな？」

「ほかの場合でも成り立つだろうか？」

と問い返し、思考を促していました。その温かくも鋭い問いかけに応えるように、式や表を読み比べながら、自分の考えを整理し、解決へと向かう姿を見せていました。子供たちの「もっと知りたい」「自分たちで解き明かしたい」という気持ちが教室全体に広がり、和やかな中にも熱のこもった学びの時間が流れていました。



同じ頃、3年生は地域の伝統芸能の学習に励んでいました。三宅島の各地区の伝統芸能を学ぶ学習であり、コミュニティ・スクールの地域活動推進委員の皆様にご協力をいただいています。太鼓の響き、踊りの所作、その背景にある歴史や願いを地域の方々から直接教えていただく中で、

「どうしてこの踊りが受け継がれてきたのだろう」

「どんな願いや意味が込められているのだろう」

と、自然に疑問を重ね、地域文化の深みに自ら近付こうとしていました。

反比例の学習で「理由」を探ろうとする6年生の姿と通じるものがあり、学ぶ内容は違っても、心の内には共通して「知りたい」という探究心が力強く息づいています。

こうした本校の日常は、私が11月に参加した第74回全国へき地教育研究大会（新潟大会）で伺った、文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村学先生の講演とも深く響き合います。田村先生は、これからの教育において重要なのは、

「子供たちが自らの人生を舵取りできる力を身につけること」であり、

そのためには、「質の高い探究的な学びの実現が不可欠である」とお話しされました。

「知りたい」「やってみたい」という思いを学びの中心に据え、課題の設定から情報収集、整理・分析、表現へと至るプロセスを往復することで、自ら学びを深め、未来を切り開く力を育てていくのだと示されていました。

私は講演を聞きながら、三宅小の子供たちの姿が次々と思いつかびました。反比例の関係を自分の言葉で考えようとした6年生、伝統芸能の奥にある意味を探ろうとした3年生。いずれも「舵を取りながら進む学び」であり、まさに未来の社会の創り手へと成長していく確かな歩みです。

三宅島の自然、文化、人々の営みは、学びに奥行きを与え、自らの人生を切り拓く力を静かに育みます。学校・地域・家庭が温かくつながることで、「どうして?」「もっと知りたい」という思いはさらに豊かに育っていきます。人生の航路を決めていく力を共に育てていきましょう。

（私自身の「舵取り」の反省を申し添えます。子供たちが学びの 舵 を取るなら、私たち大人もまた、自分の暮らしの舵を誠実に握る。対岸の 「火事」 ではなく、妻に任せっぱなしにせず自分事として 「家事」 にもしっかり取り組まねば…。そんな自戒の念を胸に）